



耕^{こう}治^{はる}人^と全^{ぜん}集^{しゅう}第^{だい}一^{いつ}卷^{かん}

一九八八年二月二〇日発行

著者 耕治人

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・牧製本

© 1988 Yoshi kô

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

（検印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

耕治人全集

第一卷



晶文社

監修

中川一政

編集委員

紅野敏郎

中島和夫

保昌正夫

村上文昭

題字

中川一政

ブックデザイン

平野甲賀

『**耕治人全集**』**第一卷・目次**

あこがれ 7

監房 20

東北の女 39

真夏 80

八大人 94

崖縁 112

結婚 142

由比と峯子 205

別れ話 287

ある谷間 308

明け方の客 333

サン・レミ脳病院

含差

440

どくだみ

459

俎上の鮒

480

指紋

500

鮓

518

さびた鋏

527

懺悔台

559

解説

紅野敏郎

583

あこがれ

あこがれ

草山夏造がこのごろ一人になると、彼を襲ってくる感情がある。電車のなかでも人込みのなかでも、彼が自分を一人だと感ずるときに、その気持はやってくるのであるが、彼が自分を一人だと一番感ずるのは、会社から下宿に帰って、一人でいるときであるから、そのときがその気持に襲われやすい。

いまま草山は下宿の二階の四畳半で、夕食になるまでのぼんやりしたあいだに、その気持に陥^おちいたのであった。いままで彼は、会社から帰ると、夕食までの時間を、身を投げ出すようにして部屋に寝ころぶか、朝出がけに、ざっと目を通した新聞を、もう一度読み直すかしていた。ところが、その気持に襲われると、四畳半のゆがんだ襖も、虫の食った狭い床の間も、すすけた壁も、まるで違った色彩を帯びはじめた。彼はなんとも知れず切ない、甘い気持を経験するのである。彼はその気持が、同じ会社に勤めている上原とき子と関連していることを知っている。

上原とき子は、会社で草山の隣に腰かけて、草山と同じ仕事をしているのであるが、草山はこれまで、とき子と打ち解けて話したこともない。彼は普段から無口の方であるが、とき子と机を並べてい

ても、事務以外のことで口をきいたことがない。仕事のことでも口をきかねばならぬときは、できるだけ言うだけである。

しかし草山も、とき子と机を並べている半年のあいだに、とき子の身の上を知らなかったわけではない。とき子は、いまの販売部に来る前は、会社の正面玄関の花崗岩の高い階段をのぼったところにある受付で働いていたのであった。とき子は、そこに十五の年から四年間働いていた。とき子は小柄であるが、それは父親に似ていることや、反対に母親は丈が高いことや、父親はかなりよかった家ですっかり駄目にしてしまつて、いまは竹細工を作るような細かい手仕事をしていることや、二人の兄妹があるなどというようなことも知った。こんなことは、会社の倉庫で部員たちと仕事をしているとき、部員たちが話していることから、知るともなく知ったのである。

しかし、そんなことを知つても、草山夏造がとき子に対して経験する切ない、甘い気持とは関係がないようであつた。もしそうであれば、草山がいくら人前では思うように口をきけない性分であつても、彼はとき子の会社の帰りを待ち受けるなり、とき子をどこかに連れ出すなりして、話はもっと具体化したことであらう。実際には、それと逆になつていたのである。草山は、とき子に対して切ない、甘い気持を経験するようになってから、隣に腰かけているとき子から逃げまわっているとは思えないのである。その証拠に草山は、とき子にものを言わねばならないときは、前よりもなお、ぶっきら棒な怒つたような口をきくようになったのである。品物を渡さねばならないときでも、とき子の手に触れないように、とき子に手渡しせず、放り出すように、とき子の机に置いてしまう。

しかしいつも、下宿の二階や電車のなかで、その気持を経験しているのならそれでよいが、都合の

悪いことには、草山は事務室で仕事をしていながら不意にその気持に陥ちることがある。そんなときは仕事に夢中になっていて、まわりのことはすっかり彼の念頭から離れてしまったときである。彼はこの世で、自分とき子の二人きりになった気がする。他の部員たちは、彼と彼女から離れた小さな存在になってしまう。今日も彼は、事務室で算盤をはじいているあいだに、その気持に陥ちたのであった。

そんなとき草山は、彼の隣に腰かけて彼と同じように算盤をはじいているとき子の白い手がちらちらするにもかかわらず、彼は自分とき子が並んで、どこかの遠い場所にでも浮かび上がってゆく気がする。彼とき子が並んだ姿が、大きく彼の前に押し出してくる。この濁った世の中で自分とき子の姿はなんと美しいものだろうという詠歎の気持が、それにまじっている。彼は茫漠とした気持になる。彼は算盤をはじく手を休めて、ぼんやりした顔を上げて向こうを見ると、彼の席の真向こうにいる副部長の金山が、彼を見て薄笑いを浮かべている。彼はそれでハッと成って、金山の顔を見つめると、金山はもう彼とき子が隣合せている反対の側の、彼の隣にいる鷹平の方を向いている。それが彼には、金山と鷹平が意味ありげな視線を取り交している気がして、すっかりどぎまぎしてしまう。草山夏造は二十四の今日まで恋したこともなく、実際には女を知らないが、清浄潔白な身とは言えない。彼は下宿の四畳半でぼつねんとしていたときや、寢床のなかで、ふと眼が醒めたときなど、女のいろんな姿態を画いた。そんなことは言わば彼の胸のなかに起こったことで、人目には触れないが、彼はこれまで販売部にいるとき子のほかの、もう一人の女の間崎繁子に、ずいぶん親切にしていたのであった。それも彼らしく、はつきりしない、じめじめしたものであったが、彼は販売部に入ったは

じめから、繁子のような女と同じ部で働くことが、ずいぶん嬉しく思われたのであった。繁子はすらりとした体つきをしていて、芯から顔色が白い。その白さのなかに赤味がさしている。そしてはきまきものを言う。彼はよく、朝早く出勤して、繁子の机に、読者名簿の入った箱を出してやったのであった。その箱は事務室の出入り口に近い会計部のうしろの金庫に入っていて、朝早く出勤したものが、他の部員のものも出してやることになっていた。

それだけではない。それだけなら、部員として当然しなければならぬことであるので、草山は澄ましていられたかもしれないが、彼は繁子にどこかに遊びに行かないかと言ったことがある。彼のように、物事を思いつめる、偏窟な人間が、繁子にそんなことを言えたのもおかしいが、二週間ばかり前のことであつた。丈の高い繁子は、よく机の脚の横木に両足を置いて仕事をしていたが、その足に力を入れすぎたのか、椅子もろとも倒れてしまった。朝の静まり返った事務室のなかで、それはひどい音がした。草山の部の者はもちろん、彼の隣の部の広告部の者も、その隣の会計部の者も、一様に笑い出してしまった。しかし繁子は、すっくりと立ち上がると、着物の前をかき合わせ、椅子を元どおりにして、常のように仕事をはじめた。それには少しの物暗さも、恥ずかしさもなかったもので、はじめ繁子の不用意さに嘲笑を覚えた彼も、かえって繁子に打ち解けやすいものを感じた。そのときから折があつたら、彼は繁子に言葉をかけてみたいと思つたのであつた。

どうして繁子に言葉をかけようかと草山が思っているうちに、その待ち設けた機会がやってきた。会社では地階に食堂があつて、社員たちは十一時半と十二時の二組に分かれ、昼食をとることになっていた。草山は繁子と同じ十一時半の組であつたが、その日、彼の向こう側にかけていた繁子が、ほ

んの一膳か二膳食っただけで、席を立ててゆくのを見た。繁子はいいつも食事は早い方であったが、そのときあまり早すぎたことが、彼には繁子が彼を待っている、その機会を作ってくれた気がした。彼が繁子のあとを追うようにして、急いで席を立て、二階の事務室に行くと、果たして繁子が机のそばの窓際に立って、外を見ていた。十二時の組のものは、これからはじめる食事の用意に更衣室に上衣を取りに行ったり、手洗所に行ったりして、人影はまばらであった。彼はそれを見澄ますと、何気なく繁子に近寄り、「間崎さん、今度の日曜日、どこかに遊びに行きませんか」と言った。

繁子は振り向いて彼を見たが、瞬間、彼の言うことがわからぬように、くぼんだ睫毛の長い黒い眼をすえて、彼を見ていた。それから薄笑いを浮かべて、「あら、あんたと。どうして。あんた男で、あたし女でしょう。そんなこと、おかしいじゃない」と言うなり、くるりとうしろを向き、窓縁に両手を置くと、前のように外を眺めた。

彼はそれで、あとの言葉も出なくなってしまったほど自尊心を傷つけられてしまったが、そこで彼は、いつものずるい考えを起こして、繁子にいま言ったことはほんの冗談にすぎないと自分に思いこませ、また繁子にもそう思いこませるようにしようと思った。それでそれからは、彼はなおいっそう黙りこみ、謹厳に身を持した。

そんなわけで草山は、そのときのことはそれですんだと思っていたのである。ところが、とき子に気を惹かれるようになると、そうは行かなくなったのである。それにはこんなことがあった。少し前のことだが、草山が地下室の倉庫に雑誌を取りに行くと、倉庫の薄暗いなかで、壁に取り付けられた電話に向かっている女がいる。彼の部には毎日いろんな注文の手紙が来るが、そのなかには会社から

発行されている雑誌の今年の二月号を送ってくれというのや、去年の七月号を頼むというのや、新規に購読を申し込んでくるものなどいろいろだ。それぞれの注文に応じて、倉庫から雑誌を持ってきて送るのであるが、女は倉庫に降りてきた草山の足音に、電話の話をやめてしまった。それが草山には女が倉庫の薄闇を通して、自分の様子を見ているように感ぜられたのであったが、彼が倉庫の入り口に近い棚から雑誌を下ろしはじめや、いったん途切れた話をはじめた。

「ね。降りてきてくれる。話があるのよ。さっきから待ってるのよ。すぐ降りてきてちょうだいな」

女は訴えるような、甘えるような声で言っている。草山はそのときはじめて、その声からそれが繁子であることに気がついた。一体なんの用事で、だれにそんな電話をかけているのだろうと草山がぐずぐずしていると、倉庫の階段を降りてくる足音がした。小刻みに忙しく歩いてくる足音に思わず彼が振り返ると、それが金山であった。金山は彼に近づくと、薄笑いを浮かべ、彼に言葉をかけず、ズボンの隠しに片手を突っ込んだまま、彼のわきを通り過ぎた。

繁子はそのとき電話を離れ、電話のそばの柱の蔭に身をもたせるようにして立っていたが、繁子のそばに行くと、「どうしたんだい。なんの用だい」と馴れ馴れしい言葉をかけた。そして草山にうしろ姿を見せたまま、ひそひそ話をはじめた。草山はそのまま立ち去るのも具合悪くなった。そして、そこにいる金山と繁子と同じように、なにか悪いことでもしているような気がしてきたのである。どうして自分は早く倉庫を出てゆかなかったのだろう、なんでぐずぐずしていたのだろう、と草山が後悔し出したとき、草山は前に繁子にただ一度「どこかに遊びに行きませんか」と言ったことを思い出したのである。繁子はそのことを、きっと金山に話したに違いない。金山と繁子はそのことで、さん

さん自分を笑ったに違いない。草山はいまそのことを思うと、もう明日から会社に行けないような気がしてくるのである。

草山がとき子に惹かれるようになってから一番困るのは、そのことである。繁子が相手にしてくれなかったから、とき子に惹かれるようになった、と繁子は思いはしないか。しかし、自分が繁子に懐いたような気持と、とき子に懐いている気持はまるで違う、と草山は思うのである。

草山はこのごろになって、繁子が仕事のうえで失策すると、金山がうまくそれを繕ってやるのをよく見るようになったが、それは草山がとき子に惹かれるようになってからのような気がする。彼の部では毎年四月になると、部長と副部長を除いた十二人の部員のうちから一名か二名、四階にある編集部に抜擢されてゆくが、草山も他の部員と同じように編集部員になりたいために一所懸命やってきたと言つてよかった。これまでのしきたりで、編集部員は販売部から抜擢することになっていた。会社ではいろんな事業をやっていたが、発行部数が五十万ほどある家庭向きの『愛の家庭』の発行が一番大きな仕事で、それだけに編集部員になることは大勢いる社員一同の希望であり、またやりがいもあるのであった。

繁子は女学校の専門部を卒業すると、編集部員になる目的で入社したのであったが、どういうものか、仕事のうえでの失策が多かった。八日ばかり前のことだが、繁子の仕事のことで社長宛てに手紙が来たことがあった。部員たちが一番恐れているのは、自分たちの仕事のことで社長宛てに行く手紙であったが、社長はその手紙が来ると、毎朝の巡視のとき、部長の古島か、古島がいなければ副部長の金山に、「調査して、あとで報告するように」と言つて、置いてゆくのである。

そのときは古島がその手紙を受け取ったのであったが、部員たちは、もしかしてそれが自分の受け持ちの区域から来たのではないかと思つて、息をつめていた。部員たちは全国を地域別にして、それぞれ受け持っているのである。社長が去ると、金山がいつもの物慣れた調子で、「どこからですか」と言つて、古島の机の上にあるその手紙を覗き込んだ。

「岡山県からですよ」古島が口もとに皺をよせ、嚙んで棄てるように言つと、「ああ、岡山県ですか。それならばが調査して、あとで社長に報告しときましょう」と言つて、事もなげに、その手紙を受け取った。金山は十五年も勤めていて、部では古島よりも古いのである。古島は金山のその言葉に、「それじゃ、そうお願いしときましょうか。ぼくはこれから会計部と打ち合わせしなくちゃならん用事がありますから」と言つて、事務室の一番向こう側にある会計部の方に行った。

古島が去ると、金山が、「岡山県と。岡山県はだれだったかなあ」と言つと、それまで顔を伏せ、しんとしていた繁子が、いきなり顔をあげ、いつもの明るい、はきはきした調子で、「あたしよ。あたしんとここに來たのよ」と言つた。

「きみのところか、しょうがないなあ、箱を持ってきてみたまえ、箱を」

「なんだか、そんな手紙というと、あたしんところね。いやだわ、あたし」

「そんなこと言つてたつて仕方がない。すぐ箱を持ってきたまえ」

繁子が立つて、机の上の読者名簿の入った箱を持って、金山のところに行く、金山は馴れた手付きで名簿をめくり出した。そして一枚を抜き出すと、片手に持った手紙と見くらべながら、「この人はね、二円払い込んであるのに、今月分が送つてこないって言うんだよ。それで調べて、至急返事を

くれと言うだけどね。やはり、きみの間違いだよ。誌代が変更になってるから、この人の分は一月延びてるんだ。ほらね、名簿にちゃんと二円払い込んだことになってるだろう。すぐ謝って、雑誌を送ってやるんだね」

金山のその言葉をきっかけに、いままで緊張していた部の空気が和らぎかけ、繁子と隣合っている鷹平が、金山が手に持っている名簿を覗き込んでいる繁子に、「間崎さんは、それで、今年の賞与は、まず五円は減るなあ」とからかうように言うのと、「ほんとよ。あたし、どうしてこんな仕事できないんでしょね。あたし、ほんとに困るわ」と鼻にかかった声で言い、両手をうしろで組み合わせ、丈の高い体を軽くゆすぶるようにした。

それと同じような手紙がとき子のところに来たことがあった。どうしてそんな手紙がとき子のところに来たか、わからなかった。とき子はこれまで、仕事のうえで間違いをしたことは一度もなかった。とき子はいつも目立たず、ひっそりと仕事をしていた。とき子は灰色の事務服を着、鼻緒の白い、破れたような草履をはいていた。草山は、とき子とその草履をよく倉庫の階段の蔭や廊下の片隅で繕っているのを見かけた。とき子は部で算盤が一番うまく、字もうまかった。だれも、とき子には冗談を言わなかった。そんなとき子がどうして間違いをしたか、わからなかった。

朝の九時ごろであった。巡視に来た社長が、その手紙を古島のところに置いた。古島は立ち上がった、その手紙を受け取った。社長が去ると、古島がとき子を呼んだ。

「山形県は上原さんでしたね」

とき子が、低くはいと答えて、古島の机のわきに立った。古島は太い、低い声でなにか言った。そ